

日本中國學會報 第七十二集
二〇二〇年十月十日 發行 拔刷

化の思想

有馬卓也

化の思想

はじめに

『國語』 晉語九に次のような一段がある。

趙簡子 難じて曰く「雀は海に入りて蛤と爲り、雉は淮に入りて蟹と爲る。鼃黿魚鱉は化するあたはざるものなし。唯だ人のみ能くせず。哀しいかな」と。……^{〔1〕}

これは人間は化することができないのを歎く一文だが、注目したいのは雀や雉が海や淮水に入ってハマグリに化することを疑うことなく認定している所にある。

さて、化という語が表す現象は廣範圍に及ぶ。教化・時勢の變化・心變わり・藥物による體質の變化等々。本稿で取り上げる化は、先の『國語』にあつたような物が、AからBに變化するという現象を對象とする^{〔2〕}。さらに、本稿で論及する化は、陰陽五行説による合理的な説明が強調されない化、即ち『易』との關係が希薄なものを指す^{〔3〕}。主に民間において素朴に信用され、語られていた化が、如何なるものであつ

有馬卓也

たか、またそれが後世どのように語られていったかを追つてみる。

まず第一章では、時令に見えるものを手がかりに、化を定期的に發生するものと不定期に發生するものという基準で考える。續く第二章では、政治レベルの時令に對するものとして、民間レベルの化を、『淮南萬畢術（以下『萬畢』と略記）』を手がかりに検討する。そして、第三章では、『論衡』『列子』『搜神記』『抱朴子』『玉芝堂談薈』『書隱叢説』などの記述に論及し、この種の化がどのようなものとして語られていったか、その變遷をたどつていく。と同時に「牛哀化虎」の用例を検證する。

筆者は近年淮南王劉安撰とされる『萬畢』の解析を行い、加えてその拾遺作業を行つてきた^{〔4〕}。さらに、譯注・拾遺の作業で得られた知見に基づいて、『淮南萬畢術』研究序説^{〔5〕}を中間報告としてまとめ、本書を手がかりとした古代の民間レベルにおける醫學思想・化の思想・生活の知恵・心を操作する呪術等への研究の展開可能性を提示した。そして、その流れの中で、「呪術系豫防醫療の一端——『淮南萬畢術』解析試論^{〔6〕}」において中國古代呪術系醫療の一端を明らかにした。本稿は、その續編として化の思想を取り上げる。

第一章 化の常非常

時の推移の中で當該の化を捉えているのが時令である。時令で語られる化は四季の推移の中で毎年繰り返される。時令の古い形を傳える『詩經』鬪風・七月や『管子』幼官には見られないが、『呂氏春秋』十二紀や『淮南子』時則訓に共通して見られる化がある。冒頭で示した雀と雉の化もここに見られる。

『淮南子』時則訓の用例を見てみよう。

- (1) (仲春) 鷹化して鳩と爲る。(時則訓)⁷
- (2) (季春) 田鼠化して鴛と爲る。(時則訓)⁸
- (3) (季夏) 腐草化して蚘と爲る。(時則訓)⁹
- (4) (季秋) 賓雀大水に入りて蛤と爲る。(時則訓)¹⁰
- (5) (孟冬) 雉大水に入りて蜃と爲る。(時則訓)¹¹

(4)(5)については、同じ『淮南子』の地形訓は「鳥魚は皆陰より生じ、陰は陽に屬す。故に鳥魚は皆卵生なり。魚は水に遊び、鳥は雲に飛ぶ。故に立冬に燕雀は海に入り、化して蛤と爲る」と述べ、陰陽によつて變化のメカニズムを説明している。同様の事例は『大戴禮記』夏小正や『禮記』月令にも見え、微妙な異同はあるものの、當時の時令には等しく見られる。

さて、化には常の化(レギュラーな化)と非常の化(イレギュラーな化)とがあり、常の化は一定周期で繰り返し發現するものであり、陰陽五行説で説明されることが多い。時令に記される化は常のものであり、自然現象の一環と考えられていた。これに對し、非常の化は、何

らかの特殊な要因によつて發現したものと考えてよい。時令説から政治の色合いが削除された時に成立するのが歲時記と言え、『四民月令』や『荊楚歲時記』には常の化は見られず、『玉燭寶典』や『歲時廣記』にのみ残っている。

一つ補足しておく、AからBへ變化したものが、一定の期間を経て再びBからAに變化する場合がある。たとえば鷹が化して鳩になり、鳩が化して鷹になると記す類がこれにあたる。さらにAからB、BからC、CからDと際限なく變化し續ける場合や、最終的にAに戻る場合などもある。『莊子』や『列子』にその用例が見えるが、これは後に言及する。

第二章 淮南萬畢術に見える化

本章では『萬畢』に見える化を取り上げる。本書が民間レベルの事例を中心に載せるものであることは先に言及した。その意味に於て、政治色の強い時令とは逆位置にあり、時令には見られない非常の化がいくつも見られる。本稿で問題とする化のほか、呪術系處方による心や體調の變化(心を操作する呪術)、藥物による體調・體質の變化、さらには天候の變化に至るまで、實にさまざまな用例が見られる。これらの詳細については稿を改めることとし、本稿では當該の化の用例を三つほど示してみたい。

(一) (文) 蝦蟇は瓜を得ば、平時に鵝と爲る。

(注) 瓜を取りて弁を去り、生きながらに蝦蟇を其の中に置く。鵝を殺して血を以て瓜に塗り、堅く之を塞ぎ、東垣の北角の深さ三尺に埋む。其の平白に發きて之を出だせ

ば、以て鶉と爲る⁽²¹⁾。

ガマ蛙を鶉に變化させる術であるが、(文)に見える「平時」という語に注目したい。これは時令説に記載されるような自然發生の常の化を人爲的に發生させる術である⁽²²⁾。現存する各月令に「蛙が鶉に化する」という例は見られないが、同様の化は『淮南子』齊俗訓・列子⁽²³⁾天瑞篇などにも見え、當時一般的な化として認識されていた可能性が高い。齊俗訓では「夫れ蝦蟇の鶉と爲り、水蠶^{ヤゴ}の蠨^{トシボ}と爲るは、皆に生の其の類に非ず」と記した上で、「唯だ聖人のみ其の化を知る」とあり、聖人のみがこの種の化を理解し得るとしている。化のメカニズムを理解していることと、化を爲し得ることを區別した上での記述であろう。ただし次に言及する『法苑珠林』十一が引用する『萬畢』は「平時」を「卒時」に作る。これについては(二)で言及する。

(二) (文) 千歳の羊の肝は、化して地宰と爲る⁽²⁴⁾。

本條は、まとまった形で化を列擧する『列子』天瑞篇及び『法苑珠林』十一(六道篇・畜生部⁽²⁵⁾)の中にも見られる。前者には時令で言及した「燕の蛤と爲る」のほか十例が見え、また後者には、季桓子が井戸を掘って土罐を得、その中に羊がいたという説話(『國語』魯語下・史記)孔子世家・『說苑』辨物・『漢書』五行志中之上など)と關連付け、最後に

『淮南萬畢』曰く「千歳の羊の肝は、化して地宰と爲り、蟾蜍は芡を得ば、卒時に鶉と爲る」と。此れ皆氣に因りて作る。相感ず

化の思想

るを以て惑ふなり。

とあり、上記した(一)と連記した上で、「此れ皆氣に因りて作る。相感ずるを以て惑ふなり」と述べている。『法苑珠林』が引く『萬畢』がこの(一)と(二)を連記している點、及び次の文の内容から推せば、『萬畢』は「千歳」と「卒時」を對象關係に置いていたことがわかる。原本『萬畢』の配列が不明であるから「平時」と「卒時」のいずれが是であるのかは判別できないので、本稿ではとりあえず『太平御覽』卷九二四(羽族部・鶉)が記す「平時」として解しておく。

(三) (注) 昔者、牛哀は病むこと七日、化して虎と爲る。其の兎戸を啓きて入るに、虎搏ちて之を殺す。方に其の虎たるや、其の嘗て人たるを知らざるなり。方に其の人たるや、其の且に虎たるを知らざるなり⁽²⁶⁾。

葉德輝は本條を(注)とする。したがって、葉德輝は「牛哀化虎」を原理的に説明する(文)があつたことを想定していたことになる。本稿第三章の二節において「牛哀化虎」について再検討するので、詳細はそちらにゆずる。

以上の三例はいずれも常識ではあり得ない化であることは先の時令の用例に等しい。これを『淮南子』にまで枠を広げれば、さらにその數は増える。そして常識の枠内の化と枠外の化とが一つの文章に混在している點に注目すべきであろう。たとえば説林訓には「水蠶、蠨と爲る」⁽²⁷⁾「子子、蟹と爲る」⁽²⁸⁾に續けて「兔齧、蟹と爲る」⁽²⁹⁾とあり、「ウサ

ギがかじった草がアブになる」が、「ヤゴがトンボになる」「ボウフラがカになる」と同列に語られていることに古代の常識の枠の廣さを見取ることができる。

第三章 化の思想の展開

本章では、先に述べた化の思想が、後世どのような形で繼承され、展開していったのかを追ってみたい。主に取り上げるのは、化に對してまとまった論説を見せる『論衡』無形篇、『列子』天瑞篇、干寶『變化論』、明の徐應秋撰の『玉芝堂談薈』所收の「女化爲男」「人化異物」、及び清の袁棟撰の『書隱叢說』所收の「物化」「化石」の諸論である。そして、この展開の中で上記した「牛哀化虎」がどのような視點で語られていったのかも追ってみる。

第一節 諸書に見える化

(一) 論衡

『論衡』無形篇において王充は特に人間について「形は變化すべからず」「形は變更すべからず」という主張を展開し、化は物の「常性」ではないとする。しかし、化全體については「雨水暴に下れば、蟲蛇變化し、化して魚鼈と爲る」「歲月推移するや、氣物類を變じ、蝦蟇は鵝と爲り、雀は蜃蛤と爲る」という條件付きの化などを挙げ、これらの化は自明のこととして論じている。その流れの中で『萬畢』にもあつた牛哀の例を黃熊に化した鯀とともに例示するほか、張良に書をさすげた老人が石に化したのも同例として提示する。年號や人名の入った用例が、化の確かさの證しであることは言うまでもない。これは後のスタンダードとなっていく。

さらに「物の變は氣に隨ふ」とも言い、加えて「時に遭ひて變化したり、「政に應じて變を爲」したりすることなどにも言及する。ただし、多様な化について例示しながらも、「時に遭ひて變化するは、天の正氣・人の受くる所の眞性に非ざるなり」「政に應じて變を爲すを政變と爲し、常性に非ざるなり」と言い、化を「正氣」「眞性」「常性」に反する非常の状態とする點では一貫している。

この王充より少し時代が下つて、張衡が『思玄賦』の中で「牛哀化虎」に言及する一節があるが、これについては後に言及する。

(二) 列子

次にまとまった形で化を論じているのは『列子』天瑞篇である。先章の(二)で示した部分とはまた別の箇所存する。前半部分は『莊子』至樂篇と重複し、後半が『列子』オリジナルとなつている。『莊子』至樂篇は「種に機あり」に始まり、間に多様な化の實例をはさんで、「萬物は皆機より出でて皆機に入る」で閉じるのだが、『列子』天瑞篇では多様な化の例示が増幅され、その中にここまで示した化がいくつ含まれている。ここではそのオリジナル部分に注目してみたい。

羊、肝は化して地、鼠と爲り、馬血の轉鄰と爲り、人血の野火と爲り、鵝の鵝と爲り、鵝の布穀と爲り、布穀は久しくして復鵝と爲る。燕の蛤と爲り、田鼠の鵝と爲り、朽瓜の魚と爲り、老韭の莧と爲り、老隄の猿と爲り、魚卵の蟲と爲るあり。鰥の獸の自ら孕んで生むを類と曰ひ、河澤の鳥の視て生むを鵝と曰ふ。純雌なるは其の名を大膏とし、純雄なるは其の名を釋蜂とす。思士は妻あらずして感じ、思女は夫あらずして孕む。后稷は巨跡に生まれ、

伊尹は空桑に生まる。厥昭は濕に生じ、醯雞は酒に生じ、羊奚は
不筍久竹に比りて青寧を生じ、青寧は程を生じ、程は馬を生じ、
馬は人を生み、人は久しくして機に入る。萬物皆機より出でて、
皆機に入る」と。(『列子』天瑞篇)

ここでは「羊肝は化して地臯と爲る」「燕の蛤と爲る」「田鼠の鶉と
爲る」など、『萬畢』や『淮南子』にも見えた化が存する。また先に
言及したAからB、BからAという循環する化が見られることにも注
目したい。さらに后稷や伊尹など、感生帝説の範疇に組み入れられる
ものも收められている。そして、最終的には「機」という『莊子』至
樂篇の語を用いて化を説明する。ここに言う「機」とは、張湛注には
「夫れ生死變化は、胡ぞ測るべけんや。……是を以て聖人は、生の常
には存せず、死の永くは滅びざるを知る。一氣の變は、適く所萬形に
して、萬形變化す。而れども化せざる者は、存して不化に歸す。故に
之を機と謂ふ」とある。

(三) 變化論

次に示すのは『搜神記』卷一六所收の干寶『變化論』である。當該
の文は『荆楚歲時記』(五月・注)では『變化論』として、また方以智
『物理小識』では『鬼神變化總論』として引用される。

本論は冒頭に「天に五氣あり」として木火金水土の五氣の性質を論
じた後に「苟も此の氣を稟くれば、必ず形はるる所あり。苟も此の形
あれば、必ず此の性を生ず」とまとめ、さらに「天に本づく者は上に
親しみ、地に本づく者は下に親しみ、時に本づく者は旁に親しむ。各
おの其の類に従ふなり」と述べた上で、具體例を示しつつ、四つの化

のパターンに論及する。

- (1) 數の至らしむるもの：「千歲之雉入海爲蜃」など6例
- (2) 時の化せしむるもの：「春分之日鷹變爲鳩」など2例
- (3) 無知よりして有知と爲るもの：「腐草之爲螢」など2例
- (4) 血氣を失わずして形性の變ずるもの：「雀之爲鸞」など2例

そして以上をまとめて「變に應じて動くは、是れ常に順ふなり」と
言い、これが常の化であるとし、それとは異なるものとして「妖書」
というグループに言及する。ここでは「氣の反する者」「氣の亂るる
者」「氣の買する者」の三つを提示し、さらに「牛哀化虎」などの三
例を挙げる。このように見てくると、干寶は化を常と非常に分け、非
常の方は人間を中心とした譴責の類と考えていたことがわかる。明確
に言語化されてはいないが、譴責の例が公牛哀をはじめいずれも人間
であることがその證となる。これは、以後のスタンダードな思考と
なり、より明確に言語化されていく。確かに『漢書』五行志下には
女が男に化した例、男が女に化した例が一つずつ取り上げられ、『論
衡』無形にも「時に或は男化して女と爲り、女化して男と爲るは」と
する一説があるが、「常性に非ざるなり」というに止まり、その持つ
意味の深い探求はない。

さらに『變化論』の特徴として補足しておけば、末尾部に「萬物の
生死と其の變化とは、通神の思に非ずんば、諸を己に求むと雖も、惡
くんぞ自りて來る所を識らんや」と言い、「聖人の萬物の化を理むる
者は、之を濟ふるに道を以てす」と言つて、化が「通神の思」を修
めた者や「性仁の萬物の化を理むる者」のみが立ち入ることのできる
領域であるとしている點が挙げられる。これは先に示した『淮南子』
齊俗訓の「唯だ聖人のみ其の化を知る」という思考の延長上にある。

今一つ補足すべきは、同時代に仙化について論じる葛洪『抱朴子』の諸篇の存在であろう。仙化の爲に必要な藥物の精製もその射程に入れば、その数はかなりのものになる。たとえば「化爲丹」「化爲赤水」「化爲石」(以上金丹)、「化形尸解之仙」(道意)、「化去」(仙藥)、「仙化」(辨問)など。また黃白篇などは、その專論と言つても大過ない。その中で合成された仙藥の効果が自然物のそれと等しいことを述べる際に、「雉は化して蟹と爲り、雀は化して蛤と爲る。自然なる者と正に同じ」と記す部分がある。これは化という天がもたらす現象が、人間によつても爲し得、その完成度の高さを誇つてゐることに注目しておきたい。第二章で言及した人爲による天爲の代行、即ち「術」の延長上にあると言つてよい。

(四) 玉芝堂談薈

明末の徐應秋の『玉芝堂談薈』に先行する明初の葉子奇の『草木子』の卷二に化に言及する一節がある^①ので、先に簡単に觸れておこう。當該部分では「其の理の變ずる者は、得て曉らかにすべきなきなり」と言つた上で、『禮記』月令の「雀の大水に入りて蛤と爲る」を「羽蟲の化して甲蟲と爲る」、「田鼠の化して鴛と爲る」を「毛蟲の化して羽蟲と爲る」として擧げ、さらに「無情の化して有情と爲る」、「有情の化して無情と爲る」例を示す。そして「牛哀化虎」を含む六例を示して「凡そ此は造物游氣、變化紛擾、得て測るべからざるなり。其の常變の兆、禎孽の萌、各おの主とする所あり」とまとめる。ここに示される「有情」「無情」は先の『變化論』に見えた「有知」「無知」に等しく、さらに「禎孽の萌」という譴責としての化に對する視點もある。

時令説の段階ではほとんど見られなかつた人間が化する(男が女に、女が男に化する例も含む)という用例が、譴責の段階で現れ始め、後世においてはそれが第一の關心事となり、議論が展開されるようになる。『玉芝堂談薈』には「女化爲男」「人化異物」など、まとまつた人間の化に關する記述が存する。

まず「女化爲男」は「女の化して男と爲る者」に始まり、「魏の襄王十三年、魏に女子の化して丈夫と爲るあり」など、歴代の用例を二種提示する。次に「男の化して女と爲る者あり」として、「哀帝の建平中、豫章に男子の化して女子と爲るあり。嫁して人婦と爲り、一子を生む。長安の陳鳳言ふ。「此れ陽の變じて陰と爲る。……」と」など、同様の七種の用例を提示する。そして、最後にその攝理として三説を提示する。

『化書』に曰く「至淫の極は、男化して女と爲る。至暴の極は、人化して虎と爲る」と。『京房傳』に曰く「女の化して丈夫と爲る。茲れ陰昌にして賊人主と爲る。丈夫の化して女子と爲る。茲れ陰勝ちて厥の咎亂亡す」と。一に曰く、男の化して女と爲るは、宮刑の濫るればなり。女の化して男と爲るは、婦政の行はるればなりと。

ここに引かれる『化書』は五代南唐の譚峭撰で、教化なども含む廣範な化を論ずる一書である。また『京房傳』及び「一曰」は、先に言及した『漢書』五行志下が引く所のものでもある。

また「人化異物」では「人の化して異物と爲る者あり」として、「鯀の黃熊に化す」など七例を列擧した上で、『吳越春秋』の闔閭を怨

んで自殺して白鶴と化した女の例や『淮南子』の牛哀の例など一六の古典に記されている用例を提示する。さらに、附記として『文海』、附抄として『歸雲外集』、『玄覽』の文を提示するが、本稿では特に『歸雲外集』に注目したい。

ここでは

- (1) 形の類するを以て化する者：「蛇化雉」など8例
- (2) 氣の類するを以て化する者：「柳絮化萍」など11例
- (3) 災異を以て化する者：「狐化人」など6例
- (4) 仙術を以て化する者：「杖化龍」など8例
- (5) 尤も異聞：「至于王莽時、五銖錢化爲龜兒」など5例

以上、5種38例が提示されている。注目すべきは(3)と(4)であろう。(3)の災異は天人相關による譴責としての化であり、『漢書』五行志に代表されるものと大差ないと思われる。この化を譴責もしくは豫兆として捉える流れが占いと結びつくのはたやすい。それがまとまった形で記されたのが唐の『開元占經』と言えよう。この二次的展開については本稿では觸れないが、『開元占經』には化を譴責・豫兆の表象として捉える事例が数多い。

その一方で(4)の仙術は明らかに魏晉南北朝期の反映と言える。化に對する従来の視點に新たな分類も加味され、文化的背景の變容とともに、化の思想は新たな展開を迎える。

(五) 書隱叢說

最後に清・袁棟の『書隱叢說』⁴⁶⁾の「物化」(卷五)と「堅凝化石」

化の思想

(卷一三)を見てみよう。この二篇は先に言及した『化書』が寶曆二年(1760)に和刻本として出版された際、新井白蛾(1715～1792)が寄せた附言が引用する所でもある。⁴⁷⁾まず「物化」においては、冒頭に「陰陽變動の爲す所」とすべての化の原因を一括し、以下化の形態を

- 1 無情の有情に化す：「腐草化螢」など計35例
- 2 有情の無情に化す：「蟹化石」など計8例
- 3 有情の有情に化す：「子子化蚊」など計52例
- 4 無情の無情に化す：「馬血化燐」など計15例
- 5 輾轉して相化す：「雀化鴿、鴿化雀」など計15例
- 6 甚だしき者：「馬化人」など計27例

の六つに分類し、總計152例を提示する。

先の『搜神記』や『草木子』よりさらに廣範に化の用例が収集され、かつその分類もより精密な形で行われている。基本的にはその原型がいずれかの典籍に見えるものであるが、それを集約したものとなっており、「無情化有情」「有情化無情」「有情化有情」「無情化無情」の四分類⁴⁸⁾に加えて、別枠として「輾轉相化」「甚者」が設定されている。

このほか、「堅凝化石」⁴⁹⁾では「天地の間、物化の在る所、之あり。而して凡そ物の石に化する者は、更に纍纍として絶へず。土氣堅凝を以てするは、即ち石と爲るのみ」と言い、「象化石」以下二四種の石化の事例が示され、最後に「夫れ物の土に親しむ者は、朽敗すれば則ち化して土と爲り、堅凝すれば則ち化して石と爲る。理固より然る

なり」と言い、理を以て石化のメカニズムを説明している。

(六) まとめ

ここで(一)～(五)の各書の内容についてまとめておこう。明確に化の分類を提示しているのは『搜神記』『歸雲外集』『書隱叢説』であり、『搜神記』には「數の至らしむるなり」「時の化せしむるなり」「無知より化して有知と爲る」とあり、『書隱叢説』には「陰陽變動の爲す所」とした上で、「無情の有情に化す」「有情の無情に化す」「有情の有情に化す」「無情の無情に化す」「輒轉して相化す」「甚だしき者」とあった。これに對し、独自の分類を提示しているのが『玉芝堂談薈』が引く『歸雲外集』であり、ここでは「形の類するを以て化する者」「氣の類するを以て化する者」「災異を以て化する者」「仙術を以て化する者」と分類していた。

時代が降れば、化を成立させているものへの言及が少なくなり、化のバリエーション(博物と分類)へと關心が移っていったことがわかる。そして、魏晉南北朝には道教や佛教の影響も受けつつ、化の主體に人間が関わることが多くなっている。これは譴責としての化についても同様である。唯一變わらない點として、化が自明なこととして語られている點、即ち化自體への疑いはさしはさまれない點を擧げることができる。

第二節 牛哀化虎について

では、前節の流れを「牛哀化虎」の用例で追ってみよう。牛哀の用例は『莊子』『淮南子』『萬畢』『搜神記』に見えるほか、これを「人化虎」のレベルに廣げれば、その例は枚擧に暇がない。たとえば『太

平廣記』虎(卷四二六～四三二)に收められた全八〇話のほとんどが「人化虎」に類するものであることも、その證左となる。

ここで先に保留しておいた『萬畢』の「牛哀化虎」を(注)とする(文)の検討を行っておきたい。もちろん『萬畢』の(文)は残されていないので想像を逞しくする外ないのだが、ここではまず『淮南子』倣眞訓の「牛哀化虎」が、いかなる文脈の中で語られているかをさぐってみよう。

まず第二章の(三)で提示した『萬畢』とは少しく文章を異にする倣眞訓の文を見てみよう。

昔、公牛哀轉病するや、七日にして化して虎と爲る。其の兄戸を掩ひらぎて入りて之を覘うかがへば、則ち虎搏うちちて之を殺す。是が故に文章獸と成り、爪牙移易し、志と心と變じ、神と形と化す。方に其の虎たるや、其の嘗て人たるを知らざるなり。方に其の人たるや、其の且に虎たらんとするを知らざるなり。(倣眞訓)

倣眞訓の當該部分は、『莊子』の大宗師・齊物論の文を使用しながら、人間の千變萬化(生老死など)を論じると同時に、形神(身體と精神)について言及する部分である。『萬畢』には見られなかった「志と心と變じ、神と形と化す」の一文が加えられている理由もここにある。『萬畢』全體の方向性を考えれば、『萬畢』の主意はここにはないと考えてよからう。『萬畢』にあつては純粹に化の一端を提示したと思われる。むしろ倣眞訓がそれを篇の主張に取り込んだと解すべきであらう。

視點を移せば、倣眞訓では「轉病」が化の原因であることが明記さ

れている。高誘は「轉病」を「易病（變化する病）」とした上で、「中國の狂疾ある者は、發作の時にあるがごときなり。其の虎と爲る者は、便ち還つて人を食ふ。人を食ふ者は、因りて眞虎と作る。人を食はざる者は、更に復化して人と爲る」とあり、後漢期に至つて、人を食えば「眞虎」となり、もう二度と人間にはもどれないという新たな要素が加わつていたことがわかる。その一方で、張衡の『思玄賦』では「牛哀化虎」に言及した後に「神達は味くして其れ、覆まよにし難し。疇たれか克く謀あきにして諸に従はんや」と言う一節があり、本件を知り難く測り難いものの例として用いている。⁽⁵³⁾

さらに『搜神記』卷一二には

魯の牛哀は疾を得、七日にして化して虎と爲る。形態變易し、爪牙施し張る。其の兄戸を啓きて入るや、搏ちて之を食ふ。方に其の人たるや、其の將に虎と爲らんとするを知らざるなり。方にまた有虎たるや、其の嘗て人たるを知らざるなり。⁽⁵⁴⁾

とあり、『搜神記』は『萬畢』『淮南子』と同質のものともみなし得る。参考として『博物志』二には

江陵に猛人あり。能く化して虎と爲る。俗に又曰く、虎の化して人と爲ると。好んで紫葛衣を著け、足に踵かかとなし。⁽⁵⁵⁾

とあり、「牛哀化虎」とはまた異なる「羆人」の用例だが、ここに「好んで紫葛衣を著け、足に踵なし」という化虎に對する新たな要素がさらに付加されている。後漢から魏晉南北朝期にかけて、様々な要素

素が加えられていったことがわかる。しかし、その後は概ね「人化虎」の實例として引かれることが多く、それが際立つた特徴を以て論じられることはなくなる。たとえば『玉芝堂談薈』卷一〇には「牛哀化虎」と題する條があるが、牛哀は冒頭に虎に化した人の實例としてその名が記されるのみで、以下は各書が載せる用例の羅列となつている。

先に言及した『太平廣記』に少しく言及しておく、ここには譴責として虎に化したとする吳道宗・費忠・蘭庭雍(56)や、病によつて虎に化した師道宣・郴州佐史・李徽などの例が見られるほか、虎皮をまとうことによる術的化は枚擧に暇がない。

おわりに

本稿では、時令説に見える化から説き起こし、民間レベルでは如何に語られていたかを『萬畢』で檢證し、さらにこの常と不常の化が後世どのように展開し、そしてまとめられ考えられてきたかを通覽してきた。

化が特定の條件によつて發生する（この條件が伴わなければ變化しない）という考え方は、「化するもの」の外側に化を成立させるものがあることを意味する。古典に見られる化は概ねこれに屬する。その際「化を成立させるもの」とは、天・陰陽・時などと表記されるが、すべて同質のものと考えてよからう。それに對して、「化するもの」に變化の要因が内在するという考え方も一方にある。意志を伴うか否か（意識的・意圖的であるか）は別として、「化するもの」自らの働きによつて變化するという視點で、これは天（道）が個體に内在するか否かという問題とも連結し、判斷が難しいのだが、化を論じる側の經驗

値が加算されていく以前(たとえば陰陽五行説によって化のメカニズムの説明をしよう以前)は、化することが素朴に信じられていたであろう。そして、こういった化は道と一體化した聖人のみが理解できるとされた一方で、これらを人為的に起こそうという動きも見られ、それが術と呼ばれていた。

しかし、當初化が論じられていた際に問題となっていた「化を成立させているもの」「化と推移できる者」といった議論は、やがて影をひそめていく。そして、牛哀の例のように、他の項目(「眞虎」「僞虎」「紫葛衣」「無踵」など)が付加されたり、化した理由を倫理的行為の缺如に求めたりと、別方向への展開を見せるようになった。

これに連動して、魏晉南北朝あたりを境に人間が化する例が多く見られるようになる。この場合、人間はもともと化する者ではないが故に、「何故彼は化したのか」という問いが発生する。そして、その答えとして、つまり化の要因として道德律が設定された。道德律への背反による化の發現という見方は、もともと中國文化にもあつたが、これは佛教によって顕在化したと言つてよい。佛罰や天罰など、様々な要因で語られる罰としての化は、かつて時令説に見られた時間の流れの中の、陰陽五行説によって合理的に説明された化とは異なるメカニズムの中にある。化する対象はそのバリエーションに限りがあるが、化した原因の方に展開が見られるようになった(化の説明の仕方の多様化)ということであろう。一方、道教の場合、道德律もさることながら、それ以上に「仙化」「羽化」の要素が大きいものがあつた。それらの反映としての「應報としての化」「仙術による化」であつた。

後世(明・清代)の文献をひも解けば、「A化B」「A化爲B」を羅列的に提示する文章は数多いが、ここでは分類の仕方や博物學的記述

に重點が置かれている。分類の仕方については『搜神記』に已にその用例が見られた。『草木子』『玉芝堂談叢』『書隱叢説』などは、過去の文化の所産を収集し整理するという視點で化に接している。したがつて、もはやここに現實として化を論じようとするスタンスはない。以上、本稿では化をいかにとらえるかという思想の變遷の大枠は示せたかと思う。ただ、すべての資料が捉えられたわけではない。また、牛哀以外の用例も、たどればまた異なつた化の思想の展開が見られるかもしれない。

特に本稿では全く扱わなかつた詩文などには、化することのない人間が懐く憧憬や恐怖としての化が見られ、興味をそそられる。これらは今後の課題としたい。

主な参考文献

- 王聘珍『大戴禮記解詁』(中華書局、1983)
 劉文典『淮南鴻烈集解』(中華書局、1989)
 葉德輝『淮南萬畢術』(叢書集成續編所收『觀古堂所著書』)
 郭慶藩『莊子集釋』(中華書局、1961)
 黃暉『論衡校釋』(中華書局、1930)
 楊伯峻『列子集釋』(中華書局、1985)
 李劍國『搜神記輯校』(中華書局、2019)
 范寧『博物志校證』(明文書局、1981)
 『太平廣記』(中華書局、1961)
 葉子奇『草木子』(中華書局、2014)
 『玉芝堂談叢』(文淵閣四庫全書)
 袁棟『書隱叢説』(乾隆九年序刊、鈔經樓藏板)

注

- (1) 「趙簡子難曰、雀入于海爲蛤、雉入于淮爲蜃。鼃鼃魚鼃、莫不能化。唯人不能。哀夫。」(『國語』晉語九)
- (2) 『莊子』齊物論の「物化」は夢を媒介としているので本稿では取り上げない。混同を避けるため、本稿では「物化」という語は使用しない。
- (3) この化については本間次彦氏の「化について」(中島隆博編『コスモロジー―天・化・時―』第二章、法政大學出版局、二〇一五)に詳しい。
- (4) 『淮南萬畢術』譯注(二〇七)、『東洋古典學研究』34〜40、二〇一二(二〇一五)及び『淮南萬畢術』拾遺(一〇七)、『東洋古典學研究』41〜46・48、二〇一六(二〇一九)。
- (5) 『東洋古典學研究』41、二〇一六。
- (6) 『東方宗教』130、二〇一七。
- (7) 「鷹化爲鳩」。高誘注に「鷹化して鳩と爲るは、喙の正直にして、鷲へ搏たざればなり。鳩は布穀と謂ふなり」とある。また『禮記』月令・鄭玄注には「鳩は穀を搏つ」とある。『玉燭寶典』二月にも「鷹化して鳩と爲る」とある。
- (8) 「田鼠化爲鴛」。高誘注に「田鼠は勳・黠・鼠なり。鴛は鶉なり。青・徐には之を鶉と謂ひ、幽・冀には之を鶉と謂ふなり」とある。
- (9) 「腐草化爲蚘」。高誘注に「蚘は馬蚊なり。幽・冀には之を秦渠と謂ふ」とある。
- (10) 「賓雀入大水爲蛤」。高誘注に「賓雀は老雀なり。人の堂宇の間に栖宿し、賓客の如き者なり。故に之を賓と謂ふ。大水は海水なり。傳に曰く「雀海に入りて蛤と爲る」とある。許慎注(『太平御覽』九四一)に「雀は屋に依る。雀は本飛鳥なり。陽の下るに隨ひて藏す。故に蛤と爲る」とある。また陸形訓にも「立冬燕雀入海化爲蛤」とある。
- (11) 「雉入大水爲蜃」。高誘注・『禮記』鄭玄注・『大戴禮記』夏小正に從

化の思想

- つて、淮水と解しておく。『本草綱目』には蜃を龍の一種とする説も見られるが、ここでは『禮記』月令(孟冬)の鄭玄注「大蛤を蜃と曰ふ」に從つて解しておく。高誘注に「蜃は蛤なり。大水は淮なり。傳に曰く「雉淮に入りて蜃と爲る」とある。
- (12) 「鳥魚皆生於陰、陰屬於陽。故鳥魚皆卵生。魚游于水、鳥飛於雲。故立冬燕雀入海、化爲蛤。」
- (13) 『大戴禮記』夏小正に「(正月)鷹則爲鳩」、「(三月)田鼠化爲鴛」、「(五月)鳩爲鷹」、「(九月)雀入于海爲蛤。一蓋有矣。非常入也」、「(十月)玄雉入于淮爲蜃」とあり、『禮記』月令に「(仲春)鷹化爲鳩」、「(季春)田鼠化爲鴛」、「(季夏)腐草爲螢」、「(季秋)爵入大水爲蛤」、「(孟冬)雉入大水爲蜃」とある。
- (14) 『玉燭寶典』では『禮記』月令・『大戴禮記』夏小正・『周書』時則・『易通卦驗』などを引いて「鷹化爲鳩」、「田鼠化爲鴛」、「腐草爲螢」、「雉入大水爲蜃」を提示し、『歲時廣記』では『禮記』月令・『周書』時則を引いて「鷹化爲鳩」、「田鼠化爲鴛」、「腐草爲螢」、「雀入大水爲蛤」、「雉入大水爲蜃」を提示する。
- (15) たとえば注(13)既出の『大戴禮記』夏小正に「(正月)鷹則爲鳩」、「(五月)鳩爲鷹」とある。
- (16) 以下に示す「萬畢」からの引用の、(文)(注)は『萬畢』の本文と注を示す。底本とする葉德輝による集本(叢書集成續編所收『觀古堂所著書』所收)は、(文)(注)そろっているもの75條、(文)(注)のみもの20條、(注)のみもの21條、計116條を収める。詳細は注(5)既出の拙稿を参照されたい。
- (17) 注(5)既出論文。
- (18) (六)「竈之土不思故鄉」、(七)「赤布在戸、婦人流連」、(七九)「埋髮竈前、婦安夫家」など。

(19) (二六)「藥令面悅。」(二〇)「守宮塗臍、婦人無子。」(七一)「服玉如玉化水法。」(七三)「伏苓散。令人身輕益氣力。髮白更黑、齒落更生、目冥復明、延年益壽、老而更少方。」など。

(20) (一一)「桐木成雲。」(七六)「欲致疾風、焚雞羽。」(七七)「虎嘯則谷風生。」など。

(21) (五八)「蝦蟆得瓜、平時爲鶉。(取瓜去瓣、置生蝦蟆其中。殺鶉以血塗瓜、堅塞之、埋東垣北角深三尺。其平白發出之、以爲鶉矣。)」

(22) 葉德輝は「理」と「術」という語を用いて化を説明し、(疑似)科學的に化の道筋を理屈付け、それを實踐することを「術」と定義している。

(23) 「夫蝦蟆爲鶉、水蠶爲蠶。皆生非其類、唯聖人知其化。」

(24) (九二)「千歲羊肝、化爲地宰。」

(25) 當該箇所の全文は以下の通り。引用部分には傍線を施してある(以下同じ)。「羊肝化爲地宰、馬血之爲轉鄰也、人血之爲野火也。鶉之爲鶉、鶉之爲布穀、布穀久復爲鶉也。燕之爲蛤也、田鼠之爲鶉也、朽瓜之爲魚也、老韭之爲菟也、老榆之爲猿也、魚卵之爲蟲。」(『列子』天瑞)

(26) 「季桓子穿井、獲如土罐。其中有羊焉。使問之仲尼曰、吾穿井而獲狗、何耶。仲尼曰、以丘所聞、羊也。丘聞之、木石之怪、**蚯蚓**。水中之怪、是龍罔。土中之怪、曰賁羊。『夏鼎志』曰、……『王子』曰、……『尸子』曰、……『夏鼎志』曰、……『淮南萬畢』曰、千歲羊肝、化爲地宰。蟾蜍得瓜、卒時爲鶉。此皆因氣作、以相感而惑也。」(『法苑珠林』十一)

(27) 「昔者、牛哀病七日、化而爲虎。其兄啓戶而入、虎搏而殺之。方其爲虎、不知其嘗爲人也。方其爲人、不知其且爲虎也。」本條に對し葉德輝は「『太平御覽』八百九十一。按此條本『淮南鴻烈解』倣真訓文。『御覽』與「燒角入山」一條連引、此稱「又曰」。下文引「虎嘯則谷風生」一條。故知此亦『萬畢術』也。」と注を付している。

(28) 「水蠶爲蠶。」高誘注に「水蠶化して蠶と爲る。蠶は青蜓なり」とある。

(29) 「子子爲蟲。」高誘注に「子子は結蠶なり。水中に跂蟲に到る」とある。

(30) 「兔齧爲蠶。」高誘注に「兔の齧みし所の草は、靈其の心中に在りて、化して蠶と爲る」とある。また「一説に兔齧は蟲の名なり」とある。

(31) 「形不可變化。」「形不可變更。」

(32) 「雨水暴下、蟲蛇變化、化爲魚鼈。」「歲月推移、氣物變類、蝦蟇爲鶉、雀爲蜃蛤。」

(33) 「物之變隨氣。」

(34) 「遭時變化、非天之正氣・人所受之眞性也。」「應政應爲變、爲政變、非常性也。」

(35) 「子列子適衛、食於道、從者見百歲鵝、撻蓬而指、顧謂弟子百豐曰「唯予與彼知而未嘗生未嘗死也。此過養乎。此過歡乎。種有幾。若蠶爲鶉、得水爲蠶、得水土之際、則爲蠶蟻之衣。生於陵屯、則爲陵鳥。陵鳥得鬱栖、則爲烏足。烏足之根爲蟻蟻、其葉爲胡蝶。胡蝶胥也、化而爲蟲、生竈下、其狀若脫、其名曰鳩掇。鳩掇千日、化而爲鳥、其名曰乾餘骨。乾餘骨之沫爲斯彌。斯彌爲食醢頤輅。食醢頤輅生乎食醢黃輓、食醢黃輓生乎九猷。九猷生乎脊芮、脊芮生乎腐蠶。」(『羊肝化爲地宰、馬血之爲轉鄰也、人血之爲野火也。鶉之爲鶉、鶉之爲布穀、布穀久復爲鶉也。鶉之爲蛤也、田鼠之爲鶉也、朽瓜之爲魚也、老韭之爲菟也。老榆之爲猿也、魚卵之爲蟲。蠶之獸、自孕而生、曰類。河澤之鳥、視而生、曰鶉。純雌其名大腰、純雄其名釋蜂。思士不妻而感、思女不夫而孕。后稷生乎巨跡、伊尹生乎空桑。厥昭生乎濕、醢雞生乎酒。』羊奚比乎不筍、久竹生青寧、青寧生程、程生馬、馬生人。人久入於機。萬物皆出於機、皆入於機。)(『列子』天瑞・【内は『莊子』と重複しない部分])

(36) この部分に「埋の鶉と爲る」と「萬畢」と同旨の文が見られ、この化が一般的に語られていたであろうことを推測させる。

(37) 「夫生死變化、胡可測哉。……是以聖人、知生不常存、死不永滅。一氣之變、所適萬形、萬形變化。而不化者、存歸於不化。故謂之機。」(『列子』天瑞・張湛注)

(38) 「天有五氣。……苟稟此氣、必有所形。苟有此形、必生此性。……本乎天者親上、本乎地者親下、本乎時者親旁。各從其類也。千歲之雉入海爲蜃、百年之雀入海爲蛤。千歲龜鼈能與人語、千歲之狐起爲美女、千歲之蛇斷而復續、百年之鼠而能相下。數之至也。春分之日鷹變爲鳩、秋分之日鳩變爲鷹、時之化也。故腐草之爲螢也、朽葦之爲葦也、稻之爲蠶也、麥之爲胡蝶也。羽翼生焉、眼目成焉、心智在焉。此自無知化爲有知、而氣易也。雀之爲蠶也、葦之爲蝦也、不失其血氣、而形性變也。若此之類、不可勝論。應變而動、是爲順常。苟錯其方、則爲妖眚。故下體生於上、上體生於下、氣之反者也。人生獸、獸生人、氣之亂者也。男化爲女、女化爲男、氣之質者也。魯牛哀得疾七日化而爲虎。形態變易、爪牙施張。其兄啓戶而入、搏而食之。方其爲人、不知其將爲虎也。方其爲虎、不知其嘗爲人也。……從此觀之、萬物之生死也、與其變化也、非通神之思、雖求諸己、惡識所自來。然朽草之爲螢由乎腐也、麥之爲胡蝶由乎溼也。爾則萬物之變、皆有由也。農夫止麥之化者、漚之以灰、聖人理萬物之化者、濟之以道。其與不然乎。」(『搜神記』卷一六)

(39) 第二章では言及しなかったが、『淮南萬畢術』においても藥物關連の化は見られ、(七一)「服玉如玉化水法(化玉如玉漿、稱爲玉泉。服之不老)」、(八二)「青白得鐵卽化爲銅」、(八三)「朱砂爲頭。」などがそれぞれにあたる。

(40) 「雉化爲蜃、雀化爲蛤。自然者正同。」(『抱朴子』黃白)

(41) 「善乎賈生之言(『史記』『漢書』賈誼傳、『論衡』物勢・自然など)。
曰「天地爲爐兮、造化爲工。陰陽爲炭兮、萬物爲銅。」或化爲人兮、又何足患。或化爲物兮、又何足博。由此推之、理之當然者固莫論、其理之

化の思想

變者、莫可得而曉也。如月令「雀入于大水爲蛤」、是羽蟲化爲甲蟲也。「田鼠化爲鴛」、是毛蟲化爲羽蟲也。松樹化爲老人、無情化爲有情也。婦人望夫化爲石、有情化爲無情也。牛哀化爲虎、江夏王氏之母、浴於川化爲龍、沒於深淵。漢末馬生人。名馬異、亡入於胡。後漢劉聰后劉氏、生一蛇一猛獸。各傷人而走。慕容燕時、有女子化爲男。宋徽宗時、有婦人生鬚度爲女道士。有男子生子、母不能收。更七人而逸。凡此者造物游氣、變化紛擾、不可得而測也。其常變之兆、禎孽之萌、各有所主焉。」(『草木子』鉤玄)

(42) 「女化爲男者。魏襄王十三年、魏有女子化爲丈夫。……又男化爲女者。哀帝建平中、豫章有男子化爲女子。嫁爲人婦、生一子。長安陳鳳(原文は缺とするが『漢書』五行志・下之上によつて補つた)言「此陽變爲陰。……」。『化書』曰「至淫之極、男化爲女。至暴之極、人化爲虎。」『京房傳』曰「女之化爲丈夫。茲謂陰昌賊人爲主。丈夫化爲女子。茲謂陰勝厥咎亂亡」。一曰「男化爲女、宮刑濫也。女化爲男、婦政行也。」(『玉芝堂談薈』卷一一「女化爲男」)

(43) 「化書」は道化・德化・仁化・食化・檢化の六篇より成り、道化の蛇雀・老楓の二章に當該の化に關する記述が見える。なお、『玉芝堂談薈』が引く當該部分は現行本には見えない。

(44) 「人有化爲異物者。若鱗化黃熊、伯奇爲伯勞、齊女爲蟬、樂浪尉爲魚、開明氏皇帝修道處西山而隱化爲杜鵑、褒君化龍、閻闔長子葬畢化爲白雉。又『吳越春秋』云「閻闔有女怨王自殺。其女化爲白鶴、舞于吳市。」『淮南子』、魯有公牛哀病七日化虎。……」(『玉芝堂談薈』卷一一「人化異物」)

(45) 「附抄。『歸雲外集』。蛇化雉、雉化蜃、魚化龍、田鼠化鴛、雀化鴿、鳩化鷹、鶉化鷓、蜃化穀。此以形類化者也。柳絮化萍、茯苓化龜、橘化枳、莧化繁、樹化牛、稻化蠶、蔬化蝶、腐菌化蜂、腐草化螢、腐麥化

蛾、朽木化蟬。此以氣類化者也。狐化人、雌鷄化雄、藥化龜、星化肉、雨化血、地化毛。此以災異者也。杖化龍、烏化鳧、人化羊化鶴、星化豕、井化酒、几化麀、杞化犬、米化舟。此以仙術化者也。至于王莽時、五銖錢化爲龜兒。元嘉中、河内司馬元胤、祭柑化爲鷺。桐廬山中竹化爲雉。唐太和九年、鄭注篋中藥化爲蠅數萬飛去。宋元祐間、辱州丹砂化爲雉。尤爲異聞。」(『玉芝堂談薈』卷一「人化異物」)

(46) 本書は關西大學附屬圖書館蔵のものを閲覽させていただいた。感謝申し上げます。

(47) 『譚氏化書』(中西卯兵衛刊、寶曆一〇年)。本書は國立國會圖書館のデジタルライブラリーで閲覽可。

(48) 「物化亦陰陽變動之所爲。無情化有情。腐草化螢、……。有情化無情。蟹化石、……。有情化有情。子子化蚊、……。無情化無情。馬血化燐、……。輾轉相化。雀化鴿、……。甚者、馬化人、……。」(『書隱叢說』卷五「物化」)

(49) 有情から無情、無情から有情の二分類については、既に『化書』道化篇の老楓章に見える。

(50) 「天地間、物化所在有之。而凡物之化石者、更疊不絶。以土氣堅凝、即爲石耳。如象化石、……夫物之親土者、朽敗則化爲土、堅凝則化爲石。理固然也。……」(『書隱叢說』卷一三「堅凝化石」)

(51) 「昔、公牛哀轉病也、七日化爲虎。其兄掩戸而入視之、則虎搏而殺之。是故文章成獸、爪牙移易、志與心變、神與形化。方其爲虎也、不知其嘗爲人也。方其爲人也、不知其且爲虎也。」「高誘注」轉病、易病也。江淮之間、公牛氏易病化爲虎。若中國有狂疾者、發作有時也。其爲虎者、便還食人。食人者、因作眞虎。不食人者、更復化爲人。」(『淮南子』傲眞訓)

(52) 筆者は注(5)既出の論文において楠山春樹氏が「淮南中篇と淮南萬

畢」(秋月觀映『道教と宗教文化』(平河出版社、一九八七)。後に楠山春樹『道家思想と道教』(平河出版社、一九九二)において本書を「萬象の生じ變化する理を察し、萬象をおのが意のままに操る術、それが萬畢術の意味なのである」という意圖の著作と位置づけられ、そこに語られる變化について、氏は神仙的(仙道的)なものが多いとし、「その中心をなしているのは同類相感の理にもとづく一種の呪術である」「それは、特別な修行を積んだり、特殊な生活環境の中にある方士の行う術というよりも、むしろ日常生活にも密着して民間に行われていたおまじないの類である」と述べておられることに同意した。そしてその内容は科學的なものから、醫學・藥學・博物學・傳承・禁忌・呪術等にいたるまで、非常に多岐にわたっていると論じた。

(53) 「牛哀病而化虎、雖逢昆而必噬。……神達味其難覆兮。疇克謀而從諸。」(『文選』卷一五所收・張衡「思玄賦」)

(54) 注(38)既出

(55) 「江陵有猛人。能化爲虎。俗又曰虎化爲人。好著紫葛衣、足無踵。」なお、『太平御覽』八八八所引の『博物志』は「江漢有羆人。能爲虎。俗云羆虎化爲人。好著紫葛衣、其足無踵有五指者、皆羆也。……」に作るが、ここでは范寧の校證に従った。

(56) 「宿罪見譴、當有變化事」(吳道宗、卷四二六所引『齊諧記』)、「被罰爲虎」(費忠、卷四二七所引『廣異記』)、「我盜寺中之物、變身如此」(蘭庭雍、卷四三二所引『錄異記』)。

(57) 「忽發狂、變爲虎」(師道宣、卷四二六所引『齊諧記』)、「因病而爲虎」(郴州佐史、卷四二六所引『五行記』)、「(狂)病」(李徵、卷四二七所引『宣室志』)。